
リリカル アリシア ♪

レフェル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカル アリシア ♪

【Nコード】

N0647Z

【作者名】

レフェル

【あらすじ】

転生者がアリシアに成り代わり、アーチャーと共に未来に飛び。フェイトと共に闘う楽しいハチャメチャ物語である。

転生者はチート？いえ、知りません

クロスする作品はFate/stay nightとFate/Zeroと魔法少女リリカルなのはです！

プロローグ（前書き）

嘘予告を本当の予告にしてしまった。

……ま、いいか。

のんびりと書いていこう！

プロローグ

研究所前

金髪のロングヘアーで緑のリボンで左右に髪結ってる女の子が研究所前で何かを見つめている。

いや、赤い宝石を見つめている。

「？あれ？あそこに落ちてる宝石は何かな？」

初めまして私はアリシア・テストロッサ。実は私、転生者なんです！

前世の記憶は、あまり覚えてないけど碌な事がなかったよう気がする。

でも、今は幸せ♪優しいお母さんに一緒にいられる今が大切だから。

さて、今そんな事よりあの赤い宝石が落ちてる方に行かないと何か面白いことがあるそうだし♪

私は宝石の傍に寄ると信じられないと思いました。

だって英霊エミヤが半透明な状態で這^ハいずっていたから。

一瞬ボーとしてたけどこのままだとまずい気がするんで私は恐る恐る声をかけた。

「あ、あの。ど、どう……したの？」

声をかけた半透明な男は私の顔を見て、驚いていた。

そして、返事をしてくれた。

「……セイ…バー…?」

私は彼の言葉を聞いて静かに首を横に振りました。

「ううん。私はアリシアだよ。私の名前は、アリシア・テストア
ッ
サ」

これが私とアーチャーとの出会いだった。

アーチャー side

私がいつこの世界にどうやって来たのか分からないが一つ言える
ことがある。

それは……死にかけていると言う事だ。

「…ぜえ…くっ…あ…」

いや、消えかけていたと言った方が正しいだろう。

私は這いずりながら考え事をしている。

ふっ、どうやら世界は私が嫌いなようだ。

突然呼び出されたと思ったたらお前なんて呼んでない消えてくれと言ってるようだ。

しかし、私はきっと私をここに呼んだ理由があると確信している。

ゆえにここで消えるわけにはいかない。

だからこそ私は探した。私を呼び出した理由を……その意味を。

……だが世界は残酷だ。これ……以上存在は……できない……ようだ。

「う……あ………?」

視界が霞み、意識も薄れゆく。

深い……どこまでも深い奈落の底へと落ちていくようだ。

「あ」

もう満足に声も出せない。

自分が何かを言っているのか、それすらも分からない。

「

」

これで、終わりなのだろうか。

自分かなすべきことすら見つからないまま消えて行くのだろうか。

込み上げる想いとは裏腹に、意識はどんどん暗黒へと沈んでいく。

ああ。もう何も視えない。

何も聞こえない。

何も感じ……ない。

もう……何……も——

そんな中

「あ、あの。どう……したの？」

その声だけは——はつきりと聞こえた。

幼い、少し戸惑いが混ざった声。

「……う……。」

暗闇に光がさす。

その声に意識を引っ張り上げられる。

朦朧とする意識の中、彼がみたのは——

「……セイ……バー……？」

金色の髪が揺れる。

しかし、少女は静かに頭を横に振った。

「ううん——。」

それが——

「私は——私の名前はね——」

それが——青年と少女の出会いだった。

プロローグ（後書き）

感想と評価をお待ちします！

第1話穴は危険だよ！！

研究所の託児所

ロングヘアーの金髪で緑のリボンで左右の髪を結ってる少女はふてていた。

「暇〜！！」

少女の名前はアリシア。

今現在、研究所の託児所にいる。

そして、持ってきた絵本が全部見飽きたらしく、本をほおり投げていた。

「あーちゃー、かえってこないかな〜」

そして私は回想していた。

倒れていたアーチャーに対して私はスグに人を呼びに行こうとしていた。

「まって！すぐにほかのおとなをよびにいつてくるから」

倒れていたアーチャーは、こう言った。

「いや、必要ない。なぜなら、私は消えるから」

「きえるって、どこにきえちゃうの？」

ゆっくりと首を振ってアーチャーが言っていると私は不安そうに聞いた。

「この世から、いや…この世界から私という存在が消えてなくなる」

私はその言葉を聞いた時、ショックを受けた。

どんな因果かわからないけど、英霊エミヤに会えたのに。

かすかに前世の記憶にある英霊エミヤを救いたい気持ちがある。

そして、今もそれを大切に持っている。

そんな私の様子を察したのか、アーチャーは苦笑していた。

「君は変わっている。赤の他人に、それに私は人間ではない。

それなのに、自分のことのように考えている。

もし、私を助けたいと思っっているのなら、君が私のマスターになっ
てくれるのかい？」

そして彼は指で赤い宝石の方を指で示した。

「え？」

私はアーチャーが示した通りに赤い宝石を掴んだ。

そして、宝石に触れた私は気づいた。

なぜなら、赤き輝きを放つ宝石は優しさを感じた。

人のぬくもりを感じた。でも、それがどんどん弱まっていた。

「君がその宝石に魔力で満たすことができれば」

でも、私には魔力がない。

どうすればいいか悩んでいたら、不思議な声が聞こえた。

その宝石からか何かなのかはわからないけど。

何か呪文のように聞こえた。

気が付いたら私はその呪文を唱えていた。

“——告げる。

汝の身は我の下に、我が命運は汝が剣に、聖杯の寄る辺なくともこの意、この理に従うのなら——”

「——我に従え ならばこの命運、汝が剣に預けよう。」

しばしの沈黙の後、宝石が光り出した。

その時、魔力が宝石に満ちたことに気づいた。

この時に私は意識を失いかけた。

「選定の声に応じる、君が私のマスターだったんだね」

アーチャーは嬉しそうに笑って言う。

「ここに、契約は成った。これより我が身は汝アリスアの剣となり盾となる。」

君の命に従い、君の為に如何な霸道とて道を切り開く事をここに誓おう。」

そのアーチャーの話聞いた私は安心して意識を失った。

それから意識を取り戻した私が見たのは心配していたお母さんとり二スとアーチャーだった。

「それからだっけ。私達と一緒に住むようになったのは」

私が回想から戻ってきたときに謎の大爆発が起きた。

それに私は巻き込まれた。

それから何日たったのかわからないけど、意識を取り戻した時。母さんがアーチャーがリニスが泣いて喜んだ…いや…訂正しよう。一部の人が鼻血をだしていた。なぜゆえ？

わたしは不思議に思いに頭に手を当てた時、不思議な感じの感触を覚えた。

その時アーチャーは私の気持ちに気づいたのか苦笑して鏡を渡してくれたのだ。

「え…ええーーーー！！！！？」

わたしは驚きの声をあげた。なぜなら、私の頭の上に狐の耳があったのだから。

呆然していると母さんとリニスが

「ますます、萌え要素があがったわ」

「ええ、上がりましたね」

と言っていた。正直いつて怖い。うう…頭痛がするよ。

そんな私に苦笑いしてアーチャーが手を差し伸べてくれたので手を握る。

すると、どこか浮遊感を感じた。不思議に思い、足元を確認すると…

「あ、あなーーーー！！！！？」

思いつきり声をあげて叫んでいた。

そして、アーチャーと共に穴へと落ちていった。

「なんでさー!!?」

と叫んでいたのを覚えてる。

それは私が聞きたいからね？

第1話穴は危険だよ！！（後書き）

感想と評価をお待ちしております♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0647z/>

リリカル アリシア ♪

2011年12月2日17時00分発行